

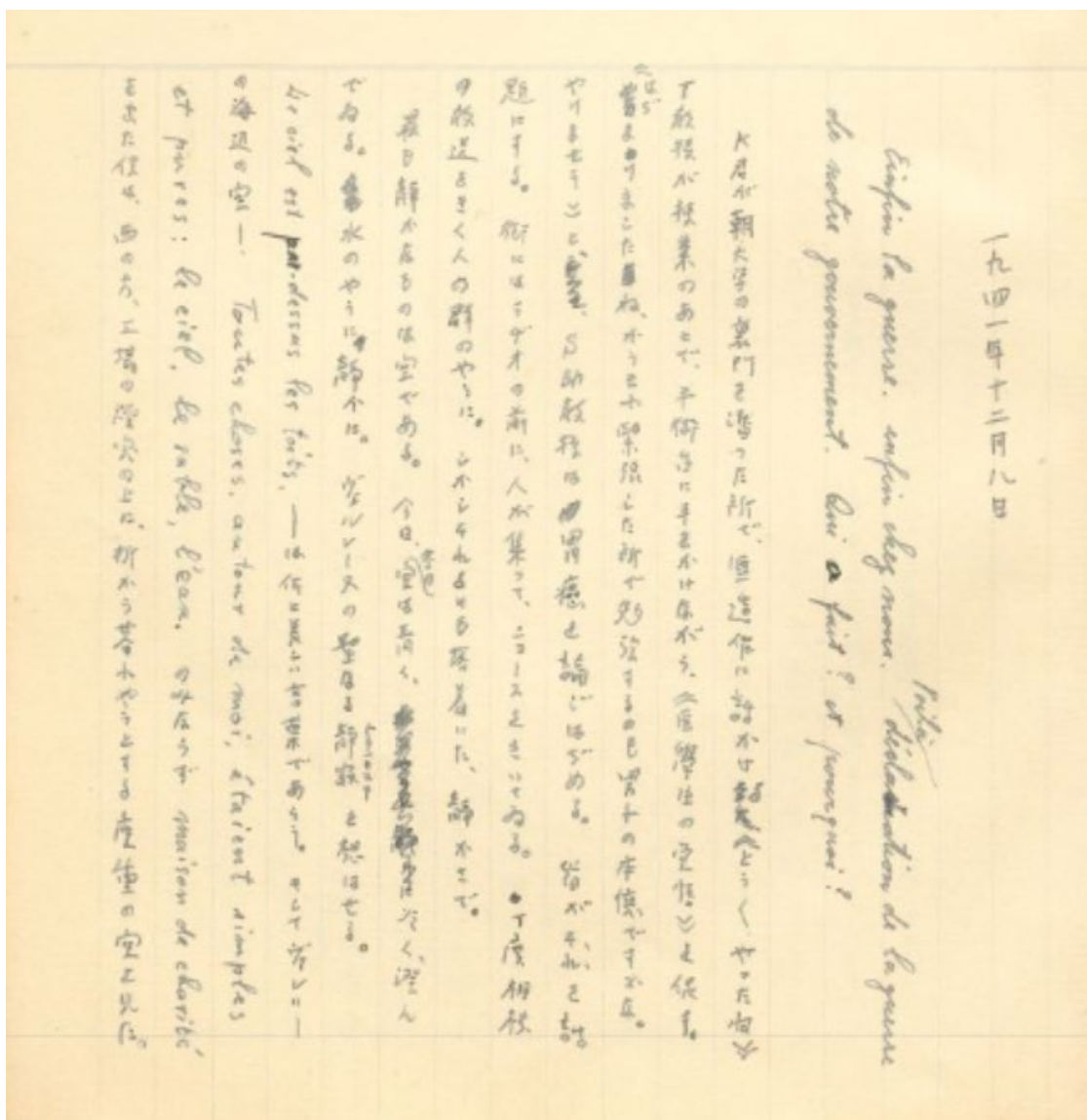
(5) 1941年12月8日

太平洋戦争の始まった日、加藤は授業に出た。教授たちは「医学生 of 覚悟」を促し、「男子の本懐」を説く。しかし、加藤はヴェルレーヌを思い、広重の絵を思い出しつつ、「弾丸や飢えは僕を変えるであらう。勇気の要るのもその時であらう。それまでは如何なるニュースも僕を変えることは決してない。僕は今も晴れた冬の空を、美しい女の足を、又すべて僕の中に想出をよびさますあの甘美な旋律を愛する。présence とは豊かなものだ」と『青春ノートⅧ』に綴った。

太平洋戦争開戦の日に、「弾丸や飢えが僕を変えるであらう」と恐れた日本人はどれほどいるだろうか。同時に、冬の空の美しさと、女の脚の美しさと、ショパンの音楽の美しさを思った人も少ないだろう。

『羊の歌』「ある晴れた日に」によれば、加藤はこの日、新橋演舞場に文楽の引越し公演を見に行ったと綴られる。何を見たのかについては書かれないが「半七さん今頃は…」という科白が引用され『艷容女舞衣 酒屋の段』であったことを示唆する。しかし、講演記録によれば、この日『艷容女舞衣 酒屋の段』は上演されず、翌9日からの公演であった。そして8冊にわたる『青春ノート』には、文楽についての記述は一行も綴られていない。やはりこの日は『青春ノートⅧ』に切符を持っていたことが記され、また実妹の証言に示唆されるように、豊増昇のベートーヴェン・ピアノソナタ演奏会に行ったと思われる（ふたつの公演は同じ時間帯の公演であり、ふたつとも見ることは不可能である）。当

時、豊増はベートーヴェンのピアノ協奏曲と奏鳴曲の全曲演奏会を続けていて、12月8日はその最終演奏会の日であった。



(写真：『青春ノートⅧ』1941年12月8日の項)